

# 「スポーツの構造」試論（1）

## － 文化としてのスポーツの位置づけをめぐる －

山本 章雄

キーワード：文化、スポーツ、発祥、形成過程、スポーツ文化、価値創造

### はじめに

日本においては、1961年（昭和36年）に施行された「スポーツ振興法」の全部改正により2011年（平成23年）6月に「スポーツ基本法」が公布され、国に於けるスポーツの振興、普及を推進する法律的な整備が実施された。その前文では「スポーツ立国の実現を目指し、国家戦略として、スポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進する。」ことが謳われており、また、その第3条ではスポーツに関する施策を総合的に策定し実施することを国の責務と位置づけ、2015年10月に文部科学省の外局として「スポーツ庁」の創設が行われた。これにより、それまでスポーツ教育は「文部科学省」、スポーツによる健康づくりは「厚生労働省」、スポーツ施設建設は「国土交通省」など縦割り行政により分断されていたスポーツ施策のシステムが一元化され、スポーツ政策の立案や実施が有機的かつ網羅的に行われるようになった。

「スポーツ白書」<sup>1)</sup>によるとこうした動きを反映し、国民のスポーツ実施率（週1日以上スポーツを実施する人の割合）は向上し、1988年に26.4%であった実施率が30年後の2018年には55.1%へと倍増したことが示されている。また、スポーツ実施率の向上は経済へも波及し、2016年に7.6兆円であった「スポーツGDP（Sports Gross Domestic Product）」が2020年には13.9兆円に達し、2025年には15.2兆円になることが「スポーツ未来開拓会議」<sup>2)</sup>（スポーツ庁と経済産業省の共同で設置）によって公表されており、「するスポーツ」（競技スポーツ・市民スポーツ・障がい者スポーツなど）だけではなく、「見るスポーツ」（競技場での応援・テレビ観戦など）「支えるスポーツ」（スポーツボランティア・障がい者サポートなど）が広く普及してきている。

このように、日本における「スポーツ」のプレゼンスは近年大きな高まりを見せており、この状況は様々な動向や数値によって証左されている。

一方世界に目を向けると、競技スポーツのメガイベントである「オリンピック（The Olympic Games）」を主催する国際オリンピック委員会（IOC：International Olympic Committee）において憲章の改変が行われ、これまで28競技に規定されていた実施競技数の制限を緩和し、2021年開催の東京大会では「スポーツクライミング」「スケートボード」「サー

フィン」などが追加実施され、2024年開催予定のパリ大会では「ブレイクダンス」の実施が準備されており、世界全体におけるスポーツ実施状況の多様化への対応が行われている。また、「オリンピック」と並行開催されている「パラリンピック（The Paralympics）」においても、これまでハンデキャップを持つ人達のリハビリテーションを主たる目的として実施されていたパラスポーツを、チャンピオンシップスポーツの趣旨も目的に含めて位置付け、出場の選手が競技の成果として名声や対価を得ることが出来るよう改革が行われており、種目の多様化だけではなくスポーツを実施する人間の多様化、目的の多様化においてもイノベーションが生起している。このような世界におけるスポーツの領域拡大の動きは実施形態（ある意味では「スポーツ概念」の変容と捉えることもできる）にも変化をもたらしている。その動向は、世界全体で1億3000万人の競技人口があり賞金総額が100億円を超える大会が行われる「eスポーツ」の盛隆、「ゆるスポーツ」という名称で提唱されているリバーシインテグレーション（Reverse Integration：逆方向の統合・動作に制約を設け心身の様態が違う人達がみんな同じ条件で競技することが可能なスポーツ）の考え方を基盤とする競技の出現、また、「超人スポーツ」として開発が進められている、人間拡張工学により考案されたデバイスを装着し、人間の能力を補綴することを認めるスポーツの登場などに現れており、この潮流に関しても、様々な事例を挙げる事が可能となってきた。

また、スポーツを取り巻く環境、特に国際社会の状況とスポーツの関わり合いにも強い関係性が生まれており、2022年開催予定の北京冬季オリンピックに向けては、開催国である中国の政治姿勢（新疆ウイグル自治区等での人権問題対応）に対する批判を明確にするため、欧米各国の政府関係者が大会への出席をボイコットする「スポーツ活動の政治化」が顕在化してきている。

このように、日本を含む世界全体において「スポーツ」は現代社会を構成し動かす重要な「社会装置（文化）」として進展・拡大してきており、この重要な「文化」を有効に活用し適正に運用することは、人間生活を幸せで豊かなものとするために必須の条件となってきた。また、このように人間生活の基盤を支える「文化」となった「スポーツ」を、将来に向けてより充実させ発展したものとするためには、現在行われている「スポーツ」の「文化としての姿」を解明し、正しく把握することが基礎研究の手続きとして重要性を増してきており、併せて、明確となった「スポーツの姿」を未来に向けてどのように機能させていくべきであるかについても検討することが求められている。

本研究では上述のような現状認識と命題を足場として論考を進めることとし、本稿では先ず「スポーツ文化」の礎である人間が生み出した「文化」そのものについて検討を行い、次いで「文化」として位置付けられる「スポーツ」の発祥や拡大の道程を検証することにより、その「姿」の形成過程を探る作業を行いたい。なお、現代におけるスポーツの「姿」を明確にするために必要な、「構造理論」を援用した内部構造、外部構造などについての論証、及び構造が明らか

になった「スポーツ・システム」をどのように有効に機能させ、スポーツの未来を構築していくかについての考察は、紙幅の関係により本稿では行わず、次稿「スポーツの構造」試論（２）－スポーツ文化の構造と今後について－にその検討を譲ることとする。

## 1. 「文化」のとらえ方

「文化」をどのように概念づけ、どのように捉えるかに関しては多くの議論が歴史的にも行われてきており、この問題に対してどのような立場でアプローチするか、どのような学問領域の考え方にに基づき解明していくかによって多様な定義が示されている。本章では、（１）人類が生起させた「文化」の発祥についてから検討を開始し、次いで（２）「文化」の考え方や歴史的な推移や発展について論を進め、最後に（３）「文化」の有るべき様態や役割について考察を行うこととする。

なお、「文化」と類似する言葉である「文明」との概念の差異については、吉山<sup>3)</sup>が論証する「文化と文明は『表』と『裏』の関係にあり、文化の中の先進文化は文明の核芯であり、文明は先進文化がもたらす進歩的な社会状態（社会的具象）であると同時に、文化の社会に対する進歩性を計る尺度でもある。他の言葉で言い換えれば、文化は文明を支え、文明は文化の社会に対する進歩的な姿（文化の文明像）である。」に準拠しながら論を進めることとする。

### （１）人類が生起させた「文化」の発祥について

鈴木<sup>4)</sup>は、人類が「文化」を生起させることができた理由を「直立二足歩行によって大脳の言語中枢が発達し神経調整が高度化したため言葉を得ることができ、また、道具の作製も可能となった。こうした能力の獲得により複雑な記憶を可能にし、思考の抽象化と体系化が行えるようになり、学習能力を飛躍的に高めたことにより文化を発生させることができた。」と述べている。その構成要素については「言語、価値、社会、技術の４分野に大別でき、言語は独自の機能と自律性をもっとも強く保ち他分野からの影響を受けにくく、価値（道徳、思想、宗教、自然観、価値観）は、人間の内面に関わりすべての行動を方向づけるものであり、社会（慣習、制度、法律、日常交際）は、他の３分野からの影響を最も受ける傾向にあり、技術は科学、経済活動、自然適応などを中心的に支え、累積的であり進歩という尺度を当てはめることができる分野である。」と論じている。

田村<sup>5)</sup>は、文化の伝達・継承に見られるプロセスやパターンを進化の視点で捉える「文化進化（Cultural evolution）」の立場より、アンドレイ・ヴィシェドスキー（Andrei Vishedsky：「Research Ideas and Outcomes」ボストン大学 2016 年）が考察する、人類が獲得した「文化」発祥のメカニズムを紹介している。これによると「現生人類には約 60 万年前に現代人と同じような音声器官が整っており、主要なコミュニケーションに使用される単語の数も現

在とさほど変わらなかった。しかし、言語使用による生活の変化にも関わらず『文化的創造力』の発生は7万年前になってようやく生起しており、音声器官の発達と文化獲得との間には『空白の50万年』という長いギャップが存在している。」と述べている。また、その背景については「文化を生起させる源となる創造力の獲得には、言葉を個別の単語として理解するだけではなく、記憶に留め複数の単語を連関させて解釈する能力としての『メンタル統合 (Mental Synthesis)』、『前頭前野統合 (Prefrontal Synthesis)』が必要である。また、人間の言語において特徴的な『入れ子構造』(「主語+述語」で成立している文中に、更に「主語+述語」の文章が挿入されているもの)や単語の柔軟な組み合わせが行われる『再帰言語』を理解するためにもこうした能力が必要であるが、人類がこの『メンタル統合』『前頭前野統合』の能力を獲得できたのは、7万年前に突然変異として複数の人間に発生した前頭前野皮質発達の遅延による理解力深化の取得によるものである。」と指摘している。

このように人類は、自然環境の激変によって引き起こされた「直立二足歩行」への行動変容、また、行動変容によって獲得が可能となった発声器官の発達を起点とし、その後長い期間を経る中で偶然に変異として起こった「前頭前野皮質発達遅延」によって手に入れた「メンタル統合」「前頭前野統合」の能力を基盤に、「文化」を形成していったことが理解できる。

また、この過程を鈴木<sup>3)</sup>の言う文化の構成要素の4分野と対比して考えると、「直立二足歩行」「発声器官発達」「メンタル統合能力」の獲得自体が人間にとっての「自然適応」活動であったと考えることができ、これが人類最初の「文化」の生起であると位置づけることも可能である。

## (2) 「文化」という言語の発祥と概念の推移について

「文化 (Culture)」という単語の語彙についてウィリアムズ<sup>6)</sup>は、「文化という言葉は19世紀初頭まで自然成長物を手入れすること(栽培・耕作)を意味していたが、その後起こった社会的、経済的、政治的な諸変化により、人間自体が自然成長物と同じように完成されていく語彙を包含するようになり、その後も語彙を発展させていき、精神の一般的な状態もしくは習慣、社会における知的発達の一般的状態、学芸の総体へと変遷し、最終的に物質的、知的、精神的生活の仕方全体を意味する言葉にたどり着いた。また、こうして生まれた文化という新しい言葉と概念は、近代的特質を有すると指摘される多くの社会構造、政治構造、経済構造、精神構造、思想構造などの様相に影響をもたらすこととなる。」と著し、文化の概念の発祥と推移を述べている。

また、この様な流れを受けた西洋世界における文化の考え方として代表的なものに関して池田<sup>7)</sup>は、タイラー (E.B.Tylor 「Primitive Culture」1871年) の定義を以下のように示している。「文化は、その広い民族史学上の意味で理解される場所では、社会の成員としての人間 (man) によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、習慣や、他のいろいろな能力や習慣 (habits) を含む複雑な総体である。」また、タイラーの文化概念の有益なところに関しては、

「人間の作り上げたものを、具体から抽象、創造、伝承、破壊に至るまですべてを包括しており、さまざま要素があり、それらの要素はお互いに絡み合う総体であるという視点を提示した点である。」と述べている。一方、タイラーが提唱する概念の限界にも言及し、「文化を、人間が作り上げ維持していく『すべて』を枚挙しない限り理解できないとする考え方であり、部分だけで文化を表象できる事実、異なった社会に異なる文化がある事実の説明がこの概念では困難であり、理論的に精彩を欠く。」と指摘している。また、この指摘をより明確なものとするため、ベネディクト (R.F.Benedict「Patterns of Culture」1934年) やギアーツ (C.J.Geertz「The Interpretation of Cultures」1973年) の考察を援用し、「文化を単数形で捉えると、人間という種が共有して持つ集団的能力と考えることができ、複数形で捉えると、それぞれの社会集団(文化的集団)によって複数存在すると考えることができる。」と論じている。一方、池田<sup>7)</sup>は自分自身の考え方にも論及し、「文化ないし文化現象とは『創造』『維持』『破壊』といった様態を持ち、一時的には構造的安定ないしは一種の自己新陳代謝を行っているため静態的に理解されるが、実態としては変化し流転するものである。また、グローバルとローカルという二元論によって整理されることもあるが、変化や流転は相互交渉によって引き起こされていることを考えると、すべての文化は『創造』『維持』『破壊』の脈絡を辿りながら相関している。」と述べている。

このように「文化」に関しては様々な議論が行われてきているが、これを大きく括ると「文化」は多様であり相互に影響しながら変遷して行くものであると理解することができ、「文化」の研究や分析を行う場合には、その基本的な視座として「総体性(ホリスティック)」が重要であることが示されている。

### (3) 「文化」形成の様態や役割について

青木<sup>8)</sup>は「文化」が形成されていく上での「言語」と「創造」の関係性について論じ、「人間の言語は意味の伝達を行うばかりでなく、意味の創造を可能にしている。かつての言語学は、人間の認識に先立って現実が存在し、言語はその現実に対応するラベルを貼っていくものであるという考え方であったが、19世紀末以降は、人間は言語によって現実を共同で創造していくという理論に転換している。この理論は、言語という『意味するもの』に対応する語彙『意味されるもの』が、言語共同体(社会集団)においては同時にそして独特に生成され、次第に一般概念化されていくと考えるものであり、こうした過程で行われる「創造」こそが「文化」の創出である。」と述べている。また、同様な指摘は近森<sup>9)</sup>によっても行われており、「言葉を透明で中立的な媒体やツールと考えるのは間違いであり、むしろ言葉はそれ自体が力を持ち、規則に従い独自の秩序を形成する。そうして人間は、自律的に運動する言葉に右往左往させられながら、文化(現実)を形づくっていく。」としている。

こうした「文化」形成の様態は、まさに人類が「文化」を創出し始めた時の言語中枢における「メ

ンタル統合」能力獲得のメカニズムと呼応しており、「言語」が如何に人間の「文化」創造活動において重要であるかを示唆している。

一方、クラックホーン<sup>10)</sup>は「文化」形成の規定要因や責務について、「およそどの人間集団の成員にしても生物学的に具備している資質には大差なく、誕生、無力、病気、老齡、死亡などの重大な生活体験を誰もが例外なく経るのである。種としての人間が持つ生物学的資質が、積み木のように組み合わせられて諸々の文化が出来上がる。いずれの文化に於いても、性別、年齢差、体力や技能の個人差など、生物学的に否応なく規定されている要因によって文化が結晶されているパターンが認められるのが常であり、文化形式は自然界の現実によって制約を受けている。」と述べ、人間が創出する「文化」の規定要因や類似性について指摘を行っている。

また、このように創出される「文化」形成における人間の責務についても論じており、「人類の起源と文化の発展の発見が、すべての発見のうちで最も偉大であると認められる日がいつか来るかも知れない。今までの人間は文化的社会的定則の前には全く無力な存在で、いつの時代になっても、人間的な価値や理想はそれらによって破られ、崩れ去るという歴史を繰り返してきた。これを必然不可避なことと信じている限り、運命と甘んじるより仕方ない。しかし今や人間は、人間の文化と社会組織は不変不動の宇宙プロセスではなく、人間の手で作られたものであり、変えることもできると悟り始めている。人間にふさわしい生き方を創造する、これが歴史の起源であり人間文化の目的である。科学の驚異がもたらした新しい力を利用してこれからの文化的課題に臨み、人間の運命を人間が司るという偉大な伝統を創る、これが現代に課せられた責務である。文化の教訓で一番大切なのは、人間が努力し、闘争し、模索しつつ目指している目標は、最終的な形で生物学的に「与えられた」ものでもなく、全く環境の力で決められたものでもない、ということであり、それに足るだけの英知と活力をもって理路整然として事に当たれば、内外の文化の理解を通じて、この狭い現代の世界を驚くほど短時間に変えることも不可能ではない。」と記している。

このように、「文化」は確かに自然の摂理に大きな影響を受け、また、時として人間の誤った欲望、争いによって理想とかけ離れた様態となってきた歴史があるが、未来に向けては、人間の幸せづくりにふさわしい「姿」へと育成していくことが、現代人に求められている課題であると考えられる。

## 2、「文化」としてのスポーツのとらえ方

### (1)「文化」としてのスポーツの萌芽

人間（ホモ・サピエンス）はその先史時代より、身体活動を生きるために、生活をするために行ってきた。それは、食物を獲得するための狩猟であったり、採取であったり、より良い環境を求めての移動であったり、また時として、自分の領域を獲得する、パートナーを獲得

するための戦いであつたりしていた。その頃の人間は、数家族による小集団（バンド：band・人間進化の段階での最も未発達な社会集団。独立した政治単位でもあり儀礼なども行っていた。）を作り、季節の移り変わりに対応し、また、食物を求めて移動生活を送っていたことが明らかとなっている。この時代の壁画調査によると、歩く、跳ぶ、投げる、人間同士の押し合い、引き合い、投げ合い、などの身体活動が描かれており、また、生活で使用する物品や自然界に生える植物などを用い、受け渡し、取り合いなどを行う余暇活動（遊び）と理解できる岩絵も残されている。

新井<sup>11)</sup>は、人間の生活として行われてきた身体活動が「スポーツ」としての原型を成してゆく過程を、過去の研究を考察することにより3つのロジックで説明している。その第1は労働の延長線として出現したと捉えるロジックで、本来は動物などを射止めるために行われていた槍投げなどが「仕事」（狩猟活動）から独立し、能力を測る目的だけに特化され、槍をどれだけ遠くへ投げることができるか、どれだけ正確に投げることができるかへと昇華していったと理路するものである。第2のロジックは、動物の一種別として存在する人間が、その本能的行為として行う「縄張り争い」「異性争奪」により引き起こされる「闘争」行動が、土地や異性を獲得するといった目的から離脱し、戦う能力を競い合う行動だけが抽出され、スポーツの原型となったと論考するものである。3番目のロジックは、超自然的な神や靈魂を崇拝する精神活動から生起したと論じるもので、神を崇拝する気持ちを表す行動として様々な「儀礼」が行われるが、この儀礼においては神に対して供物を捧げることが一般的な習わしとなっており、その供物として「踊り」や「力の披露」（重い物を差し上げて見せる、二人が対峙して格闘する、多人数が二組に分かれて力を競い合う等）が行われていたが、やがて「踊り」や「力の披露」が独立し、普段の生活の中で儀礼とは別に行われるようになったと考えるものである。

このように、生きるために必要であった身体活動がその様態を変容した過程は、本稿で「文化」の位置づけの検討を行った際に述べた「直立二足歩行、発声器官発達、メンタル統合能力の獲得自体が、人間にとっての自然適応活動であったと考えることができ、これが人類最初の文化の生起であると位置づけることも可能である。」という考え方と符合し、人間（ホモ・サピエンス）が生きるため基本的に持っている能力やこれに基づく行為を進化させる変容であり、「文化」の芽生えであったと考えることが可能である。また、青木<sup>8)</sup>の指摘を援用することにより論述を進めた、「人間は言語によって現実を共同で創造していくという理論に転換している。この理論は、言語という『意味するもの』に対応する語彙『意味されるもの』が、言語共同体（社会集団）においては同時にそして独特に生成され、次第に一般概念化されていくと考えるものであり、こうした過程で行われる『創造』こそが『文化』の創出である。」を適応することによっても、こうした変容を「文化」としてのスポーツの始まりであると考察することが可能である。それは、基本的な生活を行う上で不可欠であった「仕事」「闘争」「捧げ物」といった『意味するもの』（青木の論では「言語」）が、その概念や用い方を拡大、特化することにより、違った

形態を独特に生成し、次第に一般概念化されていき、『意味されるもの』（「能力を競う活動」「力を争う活動」「動きを愛でる活動」）を生みだしていく過程であったと解釈するもので、この過程こそが「創造」であると捉えることができることから、その成果物は「文化」であると結論づけるものである。

このように、人間社会における「文化としてのスポーツの胎動」は先史時代より芽生えていたと捉えることができる。

注) 「スポーツ」という用語の使用について

本稿で記載する「スポーツ」という言葉は、英語の「Sports」の日本語訳であり、その語源は、井上<sup>12)</sup>がエリアス（Norbert Elias）の論を紹介して述べるように「Disport（気晴らし）という言葉に由来し、さまざまな娯楽や楽しみを指すものとして広く使用されていたが、18世紀になりイギリスにおいて、肉体の行使が重要な役割を果たす娯楽の特殊な形態（現行のスポーツ）を意味する言葉として定着した。」と位置づける。

これに基づく「スポーツ」という言葉や概念は、当然、先史時代から近代に至るまでの期間には無かったこととなるが、本稿では、現在の「スポーツ」を立脚点とし過去の経緯を検証する立場を取ることから、あえて「スポーツ」という言葉を時代考証と切り離して使用することとする。

## （2）古代文明における「文化」としてのスポーツの開花

紀元前8世紀ころから始まったと考えられる古代文明の時代に入ると、胎動をはじめていた文化的な活動としての「スポーツ」は、「文化」としての要因を確実に持ち始めることとなる。この「文化」の要因に関しては、池田<sup>7)</sup>が述べているタイラー（E.B.Tylor「Primitive Culture」1871年）による文化の定義「文化は、その広い民族史学上の意味で理解されるここでは、社会の成員としての人間（man）によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、習慣や、他のいろいろな能力や習慣（habits）を含む複雑な総体である。」に依拠して検討することが可能であり、その時代の人間生活を構成する様々な要因に関して、どれだけ多くの要因に関与しているか、また、それぞれの要因においてどれだけ深く相関的に影響を及ぼしているかが、その文化性の判断基準になると考えることができる。

古代文明の中で特に「スポーツ」が栄えたのは、エーゲ海を中心とした地域で発展したギリシャ文明であり、その中でも「オリンピア競技」（古代オリンピック）の発祥がその代表格であると新井<sup>13)</sup>は述べている。この「オリンピア競技」は、紀元前776年から4年に一度開催され、当初は宗教行事であった「オリンピアの祭典」の儀礼の一部として競技が実施されていたものである。初期に実施されていた競技は「スタディオン走」1競技であり、当時ギリシャ地域を構成していた都市国家の戦士によって競走が行われており、賞金や賞品を目指したものではな



く、鍛え抜かれた身体と精神を評価されることを名誉とするものであった。こうした実施の様態を考えると「文化」としての要因として挙げることができる「信条」「価値」という要件を、当時の「スポーツ」が色濃く具備していたことは明確であり、文化としてのスポーツの確立の様子を、こうした点からもうかがうことができる。一方、この「オリンピック競技」開催の年には「聖なる停戦」が3ヶ月間厳格に実施され、オリンピアの地に競技者だけでなく学者や政治家が集まり、都市国家間の和平について議論していたという記録もあり、「政治」をも包含した文化としての位置づけが、古代文明の時代から「スポーツ」にあったことが推察され、今日の「スポーツの政治化」の源流はこの頃に遡ることができる。

一方、このように行われていた「オリンピック競技」の実施形態や精神には、時代の変化、社会の変化に伴って変質が起こっており、賞金を目当てとするプロ競技者の出現が契機となり、「信条」「価値」だけではない違った文化的要因である「経済」が付け加わることとなる。また、これに伴って「すること（精神や身体を鍛える）」が本質であったスポーツが、プロ競技者を見ようとする多くの観衆を惹きつけることとなり「見ること（観戦、応援する）」が新しく実施様態に加わり、「スポーツ」の文化的要因が多様性を持つ方向へと進展していったと考察することができる。新井<sup>13)</sup>は、この時代の競技を行った場所について論考を行っており、当時の競技場は「キルクス（Circus）」（ラテン語）と呼ばれ、これは英語の「サーカス（Circus）」の語源にあたり「娯楽」という語彙を持っていたと述べており、また、砂が敷かれた競技場は「アレナ（Arena）」（ラテン語）と呼称され、それが現在の体育館「アリーナ（Arena）」という言葉につながっているとしている。このよに「スポーツ」の文化的進展が、「建築」という文化的要因においても当時より見られていたと推察することができる。

### （3）中世・近代における「文化」としてのスポーツの結実

時代が8世紀以降の中世に入ると、封建社会の中で身分の分化が進み、上流社会であった貴族階級において、騎士による大規模な騎馬競技が行われるようになった。また、この騎馬競技は酒宴や舞踏会と連動した催し物となり、特権階級においては「社交」「遊興」としての色彩を強め、「文化」としてのスポーツは華やかな社会装置としての特徴を持つようになった。一方、庶民の間では、安息日にダンス、剣術、格闘、民族運動（走る・跳ぶ・投げるを競う運動）を楽しむ「娯楽」が生まれ、この娯楽を競い合う大規模な公開競技大会も開催されるようになり、スポーツの「文化」としての裾野が社会全体に広がっていった。こうした流れは農民にも伝播し、復活祭や収穫祭などの祝祭において踊りや民族運動を楽しみ、また、野原においてボールを奪い合うゲームも行われるようになり、実施する人間の拡大という裾野の広がりだけでなく、身体活動の内容や種類に多様性が出現し始め、「文化」としてのスポーツの膨張が始まったと考えることができる。

また、中世後半には「ルネサンス（Renaissance）運動」がヨーロッパ全体で始まり、「文化」

の復興を理念とするこの動きは、スポーツの取り扱いにも大きな影響をもたらし、それまでは実施すること、楽しむことが中心であった身体活動が、活動の内容を再検討し見直すことにより理論化し、「文化」としての復興を目指そうとする動きが始まり、この動きを追い風にして多くのスポーツに関する「書籍」が著されるようになった。また、こうした理論書、指導書を手掛かりとして、スポーツを子どもや学生に教育しようとする流れもこの頃から始まり、「教育」といった文化的要因をスポーツが手に入れるに至っており、今日の「コーチング」の萌芽がこの時代にあったと考察することが可能である。

近代に入ると、それまで「スポーツ」の文化としての膨張を支えていた地域がギリシャ、ローマからイギリスへ移り、新しい展開を生むこととなる。当時のイギリスでは「ジェントリー (Gentry)」と呼称される上流階級の人達が、多くの余暇時間を利用していろいろな「スポーツ」の創造を行っている。それは現在の「フットボール」「ハンドボール」「テニス」「ゴルフ」の原型となるスポーツであったり、「狩り」「釣り」「乗馬」「射撃」といったフィールドスポーツであったりしていた。また、産業革命によって生まれた「ブルジョアジー (Bourgeoisie)」（中産階級）の人達により「スポーツ」の大衆化の動きも生まれ、「クリケット」「ボクシング」「競馬」などが楽しめるようになり、組織的で大規模な競技会も開催され、これに対して「賭け」を行うようにもなっていた。

このように中世から受け継がれた「スポーツ」は、近代に入ると上流階級、中産階級の余暇時間の増大によってますますその裾野を広げ、また、進化していくこととなり、「賭博」といったスポーツ本来の実施形態とは違った領域の文化的要因を具備していったと考えることが出来る。

大衆化した「スポーツ」は、多様な人達の参加を促し一層繁栄していくことになるが、こうした流れは一方で、お互いの能力を必要以上に競い合うことに拍車をかけることとなり、無軌道な勝利至上主義を誘発するといった面があった。このような状況に危機感を持ったパブリックスクールの学生達は、「アスレティズム (Athleticism)」（スポーツ活動を、単に身体能力の向上や勝敗を競うものとして扱うのではなく、人格陶冶のための有効な教育手段と位置づけ重要視する考え方）を提唱することにより、「スポーツ」活動を組織的に、計画的に、専門的にコントロールし、道徳的な理念をもって実施する活動へと誘導を行っている。この潮流は後に「アマチュアリズム (Amateurism)」（スポーツ活動の目的を純粋に名誉を目指したものとして行い、経済活動や金銭とは無関係な活動であるとする考え方）として確立され、近代スポーツを支える基本的な理念として大きな影響を与えることとなる。

「スポーツ」はこの時代の動向により、「倫理」「道徳」といった人間社会において根幹を支える文化的要因を獲得していったと判断することができる。

また、社会装置として巨大化し、人間の価値観にも影響を与えるようになった「スポーツ」は、その後起こった人間の移動手段の発達、情報伝達手段の発展などによって世界中に拡散するこ

ととなる。特に移民が多く移り住み、活力のある社会を作り上げたアメリカにおいての「スポーツ」の発展は著しく、「ベースボール」「ボウリング」「アーチェリー」「バスケットボール」「バレーボール」といった新しい競技を生みだし、発展させている。このような「スポーツ」の繁栄は、古代文明の「スポーツ」において生じた道程と同様な変容をもたらし、スポーツの興業化によって引き起こされた観客の拡大による「見るスポーツ」の興隆、そして観客、応援者が増大することによる人気選手の登場へとつながり、人気選手への支援の力はこうした選手のプロ化を促し、スター選手が社会の人気者として活躍する状況を確認することとなる。

一方、世界に拡散したさまざまなスポーツは、活動の場を限られた地域や自国内に留めず、地域や国を跨いで試合や競技大会が開催されるようになり、世界に共通する競技規則の制定や使用用具規格の統一が求められるようになった。この時流の要請を受け、多くのスポーツにおいては国際間での協議が実施され、統括競技組織である「国際連盟」の設置が行われるようになり、「スポーツ」のグローバル化が進展している。

このように「スポーツ」は時代の流れとともに様々に変容し、この変容を契機として「文化」としての多くの要因を包含することになり、社会装置としての拡大、膨張を続け、21世紀初頭には「文化」としてフルスペック（Full specification）の要因を備えるに至っている。

### 3、「スポーツ文化」のとらえ方と現状について

本稿においては、「スポーツ」の発祥や拡大の道程を検証することにより、その「姿」の形成過程を探る作業を行ってきた。この「スポーツ」という言葉の起源については、前章（1）「文化」としてのスポーツのはじまりの注）においてその考え方を示し、18世紀にこの言葉が概念化され市民権を得たとする説を論拠とした。このような視点から考えると、「スポーツ」の発祥は18世紀ころとするのが論理的であり、それ以前のスポーツの発祥を促した身体活動や、スポーツの発祥を下支えした身体活動などは当時の名称を調査し、その時の概念で位置づけることが適切であり、これに関する論考が必要となる。しかしこれに関しては、名称の検証は行っていないが、前章において、先史時代から近代に至る人間の身体活動における文化的要因の推移や増加を検討することにより、その時代における身体活動の概念的な位置づけや明確化を行っており、各時代の様態に関する論考はすでに終了していると考えられる。

本稿では次に、「スポーツ」の現状を把握するために重要な言葉となる、「文化」と「スポーツ」を繋ぎ合わせた「スポーツ文化」という言語が使用され始めた経緯やその概念について考察を行い、現代における「スポーツ文化」の姿についての確認を行うこととする。

#### （1）「スポーツ文化」の考え方について

「スポーツ文化」の考え方の発生過程について井上<sup>12)</sup>は、「暴力性や残虐性を抑制しながら

平等な条件で戦うためのルールが整備され、ルール違反に対する罰則も厳格になり、フェアプレーのモラルや価値観、認識、感性が形成されていくことによって創造されていった。」と述べている。また、同時に「スポーツの本質は競争的な略奪衝動に基づくもので、そこで育成強化されるのは、暴力と策術、凶悪と悪賢さであり、狭くて自己中心的な心理習慣をもたらす。また、スポーツは肉体を機械と見なし、高性能な機械の条件に合うよう人間を容赦なく仕込むものである。と位置づけられていた価値観からの離脱の過程でもある。」と論じている。

また、永島ら<sup>14)</sup>は、「文化とは高尚なものであり、絵画、演劇、文学、詩、音楽などがこれに相当する。一方スポーツは、個性、創造力、想像力、そして思考性を抑圧し、野蛮で暴力的であり、残酷な行為と攻撃があり、弾圧、略奪の精神の表出であると理解されていたため、ほんの数十年前までは文化現象としての扱いを受けていなかった。しかし今日のスポーツは、文化としての価値モデル、態度、スタイル、規範、規則、環境を持ち、他の文化との関係性においても、また、内的な構造形成においても自己のアイデンティティを発展させており、スポーツ文化として社会からの承認を受けている。」と記している。

菊<sup>15)</sup>は「スポーツ文化」の特徴について、「社会における人びとのライフスタイルにとって基本的に望まれること、逆に言えば、社会が成立するために人びとが内面化しなければならない、教育的性格、禁欲的性格、倫理的性格、知的・技術的性格、組織的性格、都市的性格、そして何よりも非暴力的性格を保持していることである。」と述べており、これは「社会が成立するために相応しい特徴であり、社会が望ましと認めた理念や目標をスポーツが保持し、その範囲内でお互いに競走することでレベルを高めたり、より良い記録の達成を追求したり、合理的で効率的な用具や施設を開発したりすることによって確立される。」と指摘している。

これらの論述を網羅的に検討すると、以下のように「スポーツ文化」の理念、概念をまとめることが可能となる。それは、時代の流れに沿いながら様々な文化的要因を獲得してきた「スポーツ」ではあるが、「スポーツ文化」として固有の立場を醸成し、社会の中で認められた「文化」となるためには、人間や社会に対して何らかの形で寄与していくことが求められている。その「スポーツ」に課せられる社会への寄与は価値の創造であり、この価値は社会にとってポジティブな様態であることが必定となり、また、常にこれを検証していく態度も必須の事柄であると考えることが出来る。

## (2) 「スポーツ文化」の現状について

「スポーツ文化」の現状については、これに関連する事項を著した近年発刊の書籍の目次などを確認する手法により、その状況や様態について、広範囲かつ確度高く明確にすることが可能であると考えられる。ここではこうした検証方法により「スポーツ文化」の現状を見ることにし、スポーツ文化やスポーツ人類学に関する代表的な著書を抜粋し、そこに記載される題目や目次を抜き書きで示すことにより、「スポーツ文化」が関わっている事象や置かれている立場につ

いての確認作業を行うこととする。

- ① 『よくわかるスポーツ文化：改訂版』<sup>15)</sup> (2020年) ミネルブア書房  
「メディア化するスポーツ」「消費文化としてのスポーツ」「スポーツと政治・権力」  
「スポーツとジェンダー」「スポーツする身体」「スポーツとテクノロジー」  
「生活からスポーツへ」「スポーツと教育」「スポーツと芸術」「スポーツと地域社会」  
「職業としてのスポーツ」「スポーツファンの文化」
  
- ② 『よくわかるスポーツ人類学』<sup>16)</sup> (2017年) ミネルブア書房  
「スポーツと宗教」「遊びの人類学」「健康のスポーツ人類学」「動きのスポーツ人類学」  
「からだのスポーツ人類学」「エスノサイエンス身体論」「おどりの人類学」  
「マンガのスポーツ人類学」「部活のスポーツ人類学」「動物スポーツの人類学」  
「エスニシティー・ナショナルリティーとスポーツ」「スポーツ空間の人類学」  
「学習のスポーツ人類学」「民族スポーツの観光化」「民族スポーツ・エスノグラフィー」
  
- ③ 『新版：スポーツの歴史と文化』<sup>13)</sup> (2021年) 道と書院  
「体操・体育からスポーツ教育へ」「スポーツの技術・戦術・ルール」  
「スポーツと世界平和」「スポーツと政治・経済・社会」「現代スポーツの課題」
  
- ④ 『現代スポーツ評論』<sup>17) ~ 18)</sup> Vol.16 (2007年) ~ Vol.42 (2020年) 創文企画  
「フェアプレイスピリットは死んだ」<sup>17)</sup> 「スポーツの現在を検証する」<sup>18)</sup>  
「ネット時代のスポーツメディア」<sup>19)</sup> 「スポーツ思想を学ぶ」<sup>20)</sup>  
「スポーツの力を問い直す」<sup>21)</sup> 「スポーツ立国のゆくえ」<sup>22)</sup>  
「スポーツ・インテグリティを考える」<sup>23)</sup> 「体育とスポーツは何が違うのか」<sup>27)</sup>  
「スポーツマネジメント能力とは何か」<sup>24)</sup> 「テクノロジーとスポーツの変容」<sup>26)</sup>  
「スポーツ団体のガバナンスをめぐって」<sup>25)</sup> 「大学スポーツの産業化」<sup>28)</sup>

ここに列挙したように、「スポーツ文化」の現状は多岐にわたる事柄に及んでおり、スポーツ活動自体の範囲を大きく乗り越え、人間生活の様々な事象と絡み合って形成されていることが明確になったと言える。前段でも述べたように、「スポーツ文化」として固有の立場を醸成し、社会の中で「スポーツ文化」が認められるようになるためには、この多岐多様にわたる事象それぞれにおいて、「スポーツ」が何らかの形で人間生活に寄与していくことが求められていると考えられ、これを実現するためには「スポーツ文化」全体における価値の創造を目指すだけでなく、個々の事象における個別の価値創造の努力が必要であることが証左される。ま

た、この多様な価値の創造を達成していくためには、「スポーツ文化」の全体像の把握と、「構造理論」を援用した「スポーツ文化」の内部構造、外部構造などの論考が次の手続きとして求められており、併せて、構造が明らかになった「スポーツ文化」のシステムをどのように有効に機能させ価値を創造していくか、また、期待されるスポーツの未来をどのように構築していくかについての考察が今後必要であると考えられる。

なお、これらの手続きは、本稿の「はじめに」でも述べたように紙幅の関係により、継続論文として計画する「スポーツの構造」試論（２）－スポーツ文化の構造と今後について－において行うこととする。

#### 4、まとめ

本稿では、社会を動かす重要な「社会装置」として進展・拡大してきている「スポーツ文化」に着目し、先ず「文化」そのものについての検討を行い、次いで「スポーツの発祥や発展の道程」を確認し、最後に「スポーツ文化」の現状について検証した。その結果、以下のような事柄が明らかとなった。

- (1) 人類は、直立二足歩行への行動変容、発声器官の発達、メンタル統合能力の獲得によって、「文化」を形成することが可能となった。
- (2) 「文化」の考え方に関しては様々な議論が行われてきているが、その基本的な視座として「総体性（ホリスティック）」が重要であることが示された。
- (3) 現代人に求められている課題は、「文化」を未来に向け人間の幸せづくりにふさわしい「姿」へと育成していくことであることが確認された。
- (4) 人間社会における「文化としてのスポーツの胎動」は先史時代より芽生えていたことが明らかになった。
- (5) 古代文明の時代に入ると、「スポーツ」は「政治」「経済」や生活における「価値観」などの文化的要因を持ち始めていることが示された。
- (6) 中世に入ると「スポーツ」は「社交」「遊興」としての色彩を強め、また、「ルネサンス（Renaissance）運動」によって著された理論書、指導書によって「教育」といった文化的要因を手に入れていたことが確認された。
- (7) 近代には「賭博」というスポーツ本来の領域とは違う要素が加わった一方、勝利至上主義に反目する「アスレティズム（Athleticism）」「アマチュアリズム（Amateurism）」が提唱され、「倫理」「道徳」といった文化的要因を「スポーツ」が獲得していったことが明らかになった。
- (8) 「文化」としての「スポーツ」に求められるものは「価値の創造」であり、この価値は社

会にとってポジティブなものであることが要求されていることが明確になった。

- (9) 「スポーツ文化」全体における価値の創造を目指すだけではなく、個々の事象における個別の価値創造の努力が必要であることが確認された。
- (10) 今後の手続きとしては、「スポーツ文化」の全体像の把握を「構造理論」を援用した方法により検証し、併せて、明らかとなった「スポーツの構造」を有効に機能させた「スポーツの未来像構築」の考察が必要であることが提示された。

## 参考文献

- 1) 渡邊一利 編集責任者 (2020) 「スポーツ白書 2020」～ 2030 年のスポーツの姿～ 笹川スポーツ財団, p.341.
- 2) スポーツ庁・経済産業省 (2016) 「スポーツ未来開拓会議 (中間報告)」～スポーツ産業ビジョンの策定に向けて～, p.52.
- 3) 吉山青翔 (2005) 「文明と文化の概念上の非一緻性」四日市大学環境情報論集, Vol.9-No.2, pp.73-83.
- 4) 鈴木二郎 (1994) 「文化の解説」日本大百科全書 (ニッポニカ) 小学館,  
<https://kotobank.jp/word/文化-128305>
- 5) 田村光平 (2020) 「文化進化の数理」森北出版, p.256.
- 6) レイモンド・ウィリアムズ「文化と社会 ( Culture and Society )」若松繁信・長谷川光昭 訳, ミネルブア書房, p.288.
- 7) 池田光穂 (2002) 「異文化理解の基礎知識」大阪大学 C O デザインセンター  
<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/def-cul.html>
- 8) 青木恵理子 (2002) 「文化人類学・第 1 章 (人間と文化)」医学書院, pp.2-36.
- 9) 近森高明 (2018) 「全訂新版 現代文化を学ぶ人のために (現代文化研究の視点と方法)」世界思想社, pp.243.
- 10) クライド・クラックホーン (1971) 「人間のための鏡 ( Mirror for Man )」光延明洋訳, サイマル出版, p.272.
- 11) 新井博 (2021) 「スポーツの歴史と文化・第 1 章 (スポーツの起源)」道和本書院, pp.13-18.
- 12) 井上俊 (1999) 「スポーツ文化を学ぶ人のために・序論 (文化としてのスポーツ)」世界思想社, pp.1-19.
- 13) 新井博 (2021) 「スポーツの歴史と文化・第 2 章 (時代と社会の関わり)」道和本書院, pp.20-37.
- 14) 永島惇正 他・訳 (2004) 「文化としてのスポーツ (Sport als Kultur)」オモニー・グルーベ 著, ベースボール・マガジン社, p.155.
- 15) 菊幸一 (2020) 「よくわかるスポーツ文化論:改訂版・序 (スポーツ文化論の視点)」ミネルブア書房, pp.2-5.

- 16) 寒川恒夫 他 (2017) 「よくわかるスポーツ人類学」 ミネルブア書房, p.211.
- 17) 中村敏雄 他 (2007) 「フェアプレイスピリットは死んだ」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.16.
- 18) 友添秀則 他 (2009) 「スポーツの現在を検証する」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.20.
- 19) 清水諭他 (2010) 「ネット時代のスポーツメディア」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.22.
- 20) 友添秀則 他 (2010) 「スポーツ思想を学ぶ」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.23.
- 21) 清水諭 他 (2011) 「スポーツの力を問い直す」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.25.
- 22) 友添秀則 他 (2012) 「スポーツ立国のゆくえ」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.26.
- 23) 友添秀則 他 (2015) 「スポーツ・インテグリティをを考える」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.32.
- 24) 清水諭 他 (2018) 「スポーツマネジメント能力とは何か」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.39.
- 25) 友添秀則 他 (2019) 「スポーツ団体のガバナンスをめぐる」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.40.
- 26) 清水諭 他 (2019) 「テクノロジーとスポーツの変容」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.41.
- 27) 友添秀則 他 (2020) 「体育とスポーツは何が違うのか」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.42.
- 28) 友添秀則 他 (2017) 「大学スポーツの産業化」現代スポーツ評論, 創文企画, Vol.36.

(2022年1月21日投稿)